

book

吉田 豪

読まずにはいられない

これは相当
偏屈でしょ!



『ロング・グッバイのあとで』

瞳 みのる 著

(1200円+税/集英社)

往年のアイドルグループ、ザ・タイガースの「ビー」が、芸能界引退後、約40年の沈黙を破ってすべてを語った初の自伝

photo 編集部・東川哲也



『いと 運命の子犬』

原田マハ・文、秋元良平・写真

(1190円+税/文藝春秋)

1971年のザ・タイガース解散コンサートの夜、「十年後に会おう、君らはきっと乞食になっているだろう」との捨て台詞を残して約40年間メンバーとの交流を絶ち、取材も全て断り、子供にも過去を隠して高校教師として生きていた「ビー」こと瞳みのるが、離婚&大病を機に自伝を執筆!

そんな人なので文章はタレ
ストライターが書くよりも硬くて偏屈さが感じられる一冊だ。「僕が調理師の免許を取ったのも、店がまずいものを出すなら、自分で作ってやろうという意気込みからだ」って、これは相当偏屈でしょ!
20年ほど前、「鶴ちゃんのブッスン・5」で「よろしくお願ひします」と言うのが仕事のアイドルに「その『宜しく』というの、どういう意味

ですか」と聞かれた永六輔が、「よろしくは、『宜しく』と書くね、宣とは言うということ、あつちで言ったり、こつちで言ったりして風呂敷のように広げ敷くことだよ」と答えたのを、「思わずテレビの前でズッコケた。『宜しく』の『宜』は音が『宜』で『友誼』の『誼』と同義」などと突っ込むのも偏屈すぎ!
当然、こんな人が芸能界でやっていけるわけもない。
しかも、当時から「小田実氏に『何でも見てやろう』(一九六一年刊)」という著作があり、当時の僕の愛読書であった。これまで、自衛隊の幹部候補生になろうとしたこと、

共産党の青年組織、民主青年同盟に入ったことや創価学会の会員になったことは、僕としては小田氏のこの精神と共通していると思っていた「ような人なので、土門拳に触発されてカメラマン志望になったり、「新劇の名優になりた」と決意したりを経て、故郷で学生に戻るため、「毎日五百円の生活費に切り詰めて」「ほぼ一年間で一千万円を貯め」、教師となるのであった。幼少期、貧乏で物も買えないのに持ち物検査をされ「教師なんておよそ人の気持ち、子供の気持ちなど分かっちゃいけない。僕はそのとき心に誓った。間違っても一生教師なんかにはなるまい」と言っていたくせに!

よしだ・こう・1970年生まれ。書評家、インタビュアーにして連載数が20を超える人気ライター。著書に「新・人間コケ五」(兼さんのポッド 吉田豪のサブカル交遊録)など。

「テイク新聞」と言えば新聞を持ってきてくれ、「テイク携帯」と言えば、携帯電話を取ってきてくれる。身体障害者をサポートする「介助犬」を目指した子犬、「いと」を追ったノンフィクションだ。
子犬が介助犬になるためには、2年の月日と、数百万円の費用がかかる。ボランティアで子犬を預かる「パピーホーム」で愛情たっぷりに育てられ、訓練を受ける。そして、ついにいとは立派な介助犬になりました——というハッピーエンドでないところがミソだ。本書は、介助犬に向かいたいと判断された「落ちこぼれ犬」の話なのだ。
『盲導犬クイールの一生』の写真家が撮った、いと表情は、あざとさを感じるくらい、純粹で、けなげで、愛らしい。それを見て、「泣くもんか」と思いながら、ちよっと泣いてしまった。(さ)